神様と師匠

龍の花嫁　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18397561

R-18, モ腐サイコ100, モブ霊, もぶ神様×霊幻, 本番無し, 女装(白無垢), 芹霊, 道具使用

相談所vs神様６話目です。芹霊も絡みますがあくまでモブ霊となります。師匠は浮気しません。今回ちょっぴり道具も使用します。お好きな方はお楽しみください。

Table of Contents

龍の花嫁　6

タイムリミットまで、あと３日。

芹沢とエクボは、また朝早くからやしろに向かっていた。
「無いな……」
生け贄をまつった祠を探すためである。
だが、2人で庭を隅々までさがしたが、鳥居の跡が見つかったぐらいで、祠は見つからなかった。
「……そうか、隣の公園だ！行くぞ芹沢！」
「命令しないでよ」
はたして公園の隅。
誰からも忘れられた場所に、その小さな祠はあった。
「うっ……酷い量の悪霊だね……」
芹沢の目には真っ黒な影がおびただしい数、巻き付いて見える。
「これは悪霊じゃねぇよ。呪詛だ。……お前も聴いてみろ」
芹沢は目を閉じ、無念の声に耳を傾けた。
『なぜ、今なのだ……』
『ああ、口惜しい……』
『明日が祝言だった……』

『せめて、初夜を終えてから……』

冷や汗をびっしりかきながら、芹沢は目を開いて意識を呪詛から遠ざける。
「これって……」
「ああ、花嫁を奪われた恋人たちの怨嗟だ。……これで花嫁の隠された条件が分かったな」
ほんといい趣味してやがるぜ神様、とエクボが吐き捨てる。

「生け贄はみんな処女だ」

※※※※※※

「というわけでだ、霊幻。お前誰かに掘られてこい」
がしゃん、と茂夫が湯呑みを倒す。
動揺していつものように超能力で水滴を上手く制御できない。
「……本当にそれで神様から逃げられんのか？」
「絶対ではありませんけど、祟りなんてヤバいものから逃れる可能性があるなら、何でも試してみるのがいいと思います。命には代えられない」
「だってよ、モブ」
ニヤニヤと悪い大人の顔をしながら霊幻が茂夫に話しをふる。
茂夫は昨日、霊幻に「セックスはしない」と宣言したばかりだった。
「あ、そうか。霊幻さんには影山先輩がいるんだから、何の問題も無かったですね」
ほっとしたように芹沢は言うが、茂夫はぎゅうっと手を握って俯いてしまっていた。
「……僕は未成年なので……それに、師匠に宣言したので……できないです」
え、と芹沢が凍り付く。
「じゃあ、適当な店にでも行って処女捨ててくるかぁ」
「「やめてください」」
茂夫と芹沢の声がハモった。
「霊幻さん、それなら、俺とセックスしませんか」
芹沢の声がやけに相談所に響く。
「は？何言ってんだお前」
「緊急事態ですし、俺ならかまわないです。見ず知らずの人となんて、トラブルも病気も怖いじゃないですか」
ぐわ、と相談所内の物品が力を帯びて浮かび上がる。
茂夫の怒りが漏れていた。

「芹沢さん、アンタどういうつもりだ」
「どうも、こうも……セックスしないと霊幻さん死んじゃうんですよ？」
「だからって……！好きでも無いのに師匠を抱く、だなんて、気軽に……！」
「好きだよ」
ビシィ、と文字通り空間が凍った。茂夫によって物品が浮いたまま固定されていた。
「勝ち目無いの分かってたし、言うつもりも無かったけど。それで影山先輩が納得するのなら。言うよ。俺は霊幻さんが好きだ。だから何も問題なくセックスできるよ」
冷や汗をかきながら、淡々と芹沢は茂夫に告げる。茂夫からの圧が、物理的な重さとして芹沢をさいなもうとしていた。
そこではっとする。
茂夫と芹沢はおそるおそる、蚊帳の外にしていた霊幻をうかがう。
「えっ……と、」
顔を真っ赤にして戸惑うまんざらでもなさそうな霊幻に、芹沢は喜び、茂夫は絶望した。
「俺も……知らないヤツに身体触られるよりは、芹沢の方がいい……かな」
「師匠っ！」
「モブ、これはいつもの除霊と同じだ。お前ができない時に芹沢にやってもらう。それだけのことだ」
そんな訳はない。茂夫は腹の底がどんどん冷えていくのを感じていた。だめだ、師匠の全ては僕のものなのに、そうだったはずなのに、と焦りが広がっていく。
霊幻はチラッと芹沢を見て、すぐ戸惑ったように机に視線を落とす。
「……優しくしてくれよ？」
その恥じらった様子にごくりと芹沢が喉を鳴らした瞬間。
バン、と茂夫が霊幻の机を叩いた。
「ダメです」
ふーふーと息が漏れ、頭に血が昇っている茂夫に霊幻はびっくりす

る。
「アンタは僕が抱く」
じっと睨むように茂夫は霊幻を見る。
「こんな、こんなことになるなんて……でも僕のポリシーで師匠を他の人に抱かせるぐらいなら、もう、そんなもの、どうでもいい」
「でも、青少年保護育成じょうれ「そんなものバレなければいいだけの話だ！」」
被せ気味に茂夫は霊幻に叫ぶ。
興奮して溢れた涙に、そっと優しく霊幻は手を差し出す。
「……分かった。モブ、ホントにそれでいいんだな？」
「それ以外ないでしょうが……っ！」
「意地悪な質問だった、悪いな、モブ。……お前にまかせる」
やれやれ、と芹沢はため息をつく。
「芹沢も悪いな、一芝居打ってもらって」
「？ああ、はぁ。何のことですか？」
「いやその……え？」
「え？」
しばし芹沢と霊幻は見つめ合うが、芹沢がペコリと会釈して仕事に戻ったので、釈然としないまま霊幻は目の前でうずくまる茂夫に視線を戻した。
「鉄の心臓だな、お前」
こそっとエクボが芹沢に耳打ちする。
「？……ああ、そのことか。元々言うつもりなかったし、言ったところで何か変わるのも望んで無いし、それでも離れるつもりは無いだけだから」
「はぁ〜、変わったやつだな、お前」
「……最初から勝ち目のないところにいる事に気づいたヒトは、そんなもんじゃないの」
でも。
「油断したらこうなる、ってことを伝えられたのは、ちょっとスッキリしたかな」
寂しそうに、でも嬉しそうに芹沢は微笑んだ。

※※※※※

施術室にて。
「と、言うわけで、腹を決めた以上、師匠には開発されてもらいます」
がっと霊幻の両肩を掴みながら、すわった目で茂夫が言う。
「お、おう」
「これが何か分かりますか、師匠」
カバンからいびつなT字形の器具を取り出して茂夫がきく。先程ヤマゾンのチョッパヤ便で事務所に取り寄せたものだ。
「……バイブ？」
「違います。これは男性のアナル開発用の道具で、エネマグラと言います。詳しくは調べてください」
「へー、便利なものがあるんだな」
「これを今から丸一日、可能な限り装着していてください」
「……はぁ！？」
「あ、先ずは一緒に頼んだ酔い止め薬飲んでくださいね」
「ちょっと待て、丸一日って」
「アンタそれぐらいしないとアナルセックスってできないんですよ、分かってますか？指挿れたらその内気持ち良くなってくるなんて都市伝説……とまではいかないけど、めちゃくちゃ時間かかるんですから」
「う……」
前戯で吐いた手前、霊幻はこればっかりはいつものように言い返せなかった。
黙って酔い止め薬を受け取り、飲む。
「身体が『気持ちいい』って覚えれば、吐き気は無くなるそうですから。それまで頑張ってください。……ただ、間に合わなかったら酔い止め飲んでもらいながら抱くことになりますけど……」
「いいよ、それで」
エネマグラとコンドームを受け取った霊幻はその大きさに少し尻込みする。
「最初は挿れてあげますね。座薬と同じく他人が挿れた方が楽で

しょうから」
「え！？いい、いいって！」
「ほら、脱いで、四つん這いになってください」
「……なんか楽しそうじゃない？お前」
ぐ、と押し黙り複雑な顔の茂夫。
「……恋人の開発が楽しい、のは、当たり前じゃないですか」
霊幻が赤面させられるハメになった。
弟子の素直さに免じて霊幻はズボンと下着を脱いで施術台の上に登る。
ぺたん、と肩を下に付けてお尻を上げた、いわゆる女豹のポーズを取る。
ぶわわわ、と茂夫の顔が赤くなった。
「……っ、ローション入れますね」
茂夫は震える手で、先端が丸くなった細い筒状の注射器にアナル用ローションを吸い上げる。
霊幻の様子を見ながら、注射器をゆっくり挿入していった。
「ん……」
「！大丈夫ですか？」
「違和感は凄いけど……細いせいか？吐き気とかは大丈夫だ」
「よかった」
ゆっくりとピストンを押して、中のローションを霊幻に流し込む。
なんとか問題なく流し込めた。
が、注射器を抜く時に少しトロリとローションが入り口を濡らして、茂夫は自分が硬くなるのから何とか気を逸らすのに必死になった。
入り口にもたっぷりローションをつけて、茂夫はゴムを付けたエネマグラをゆっくりと霊幻に挿入していく。
「んぅ……んっ、ん……はいって、るのか……？」
「……っ、入って、ますよ」
ぐぷ、ぐぷとゆるやかな出っ張りを順に霊幻の後口が飲み込んでいくのを、生唾を飲み込みながら茂夫は見ている。
さすが医療器具、霊幻に負担はかかっていないようだった。
「入った……？」

「全部、入りました」
どこか睦言のようで。
茂夫はくらくらする。
「そっか、あんまり違和感無いものなんだな」
霊幻は起き上がり、ボクサーパンツとズボンを身につける。
「たしかにこれなら仕事も問題なくできそうだ」
「え？あ、そうですか」
気持ち良くて腰砕けとかになっちゃうかな……と思っていたので。
少しだけ、ほんの少しだけ、茂夫はガッカリした。

※※※※※

儀式に行くと、今日は霊幻は風呂に入れられて白無垢に着替えさせられたあとは、すぐやしろに連れて行かれた。
まさかエネマグラを挿れたまま白無垢を着せられるとは思ってなくて、霊幻は落ちないかひやひやしながら歩いていた。
「……固定バンドも一緒に買った方が良かったですかね」
霊幻は聞こえないふりをして、やしろに敷かれた布団に横になった。

ほどなくして霊幻の意識は無くなった。

※

どこの神社だろうか。
俺は白い着物を着たモブに手を引かれながら、白無垢を着て長い階段を登っている。
石段だ。下駄が辛い。
「モブ、足が痛い」
「『霊幻』、『大丈夫』だよ」
モブにそう言われると突然楽になるのだから、俺も現金なものだ。
「モブ、どこに行くんだ？」
「今日は両親に挨拶ですよ」

「えっ」
モブの両親に、挨拶……どのツラ下げて！？というか別れてるのに！？！？
「いやだ、モブ、俺は行かない」
「もう着いたよ」
気がつくと大きなやしろの中に居た。
目の前のこれまた大きな神棚に、鏡と矛がまつられている。
「神々よ。このおのこが私の妻となるものです」
ああ。
したく無いのに、頭をさげさせられて。
頭を上げると、いつもの日本家屋の中に居た。
「ししょう、おつかれさまです」
妙にあの神社は空気が張り詰めていて、本当に疲れた。
「さ、こちらへ」
両手を広げてモブが待っている。
「行くわけねーだろ」
あ、れ。
俺の意志に逆らって、俺の身体はモブの胸にしなだれかかった。
それをすかさずモブは抱きしめる。
おかしいな、なんだか身体の自由がきかない……。
「『霊幻』、今日は面白いものを付けてきているね。張り形かい？」
ぎょっとした。
モブが俺の着物のすその合わせに手を差し込んでくる。
「いやっ……いやだ、やめてくれ、モブ！！」
ろくに抵抗ができない。
身体がおかしい。
そんなのお構いなしに、モブは俺の太ももを撫で回す。
「ぁっ……いやだ、頼む……」
「少し劣情を足してあげよう」
モブがトン、と俺の下腹部を指で叩くと、ずくずくずく、と全身が快感で侵された。
「ぅあ……っ！あ、ぁあ……っ！」

モブの足をまさぐる手に身体がびくびくと反応する。射精してしまいそうだ。
「さて、どんなおもちゃで遊んでいるのかな？」
肌襦袢を捲り上げて下肢に触れて来ようとする×××を。
「いやだ──！」
俺は明確に拒絶した。

モブ以外に触られたく無い！！

バチィ、と龍神の手が弾かれて。

ビキリ。
また石の指輪にヒビが入った。

「……驚いたね、『霊幻』。儀式が進んで、貴方にも少し神気が宿るようになってきたみたいだ」
「『荒潮川』、この強姦魔め。はやくこの呪いを解け……！」
俺は下腹部をさする。
「……それは寿ぎ（ことほぎ）だよ。解くとか、解かないとかそういうものじゃない。ありがたく受け取って欲しいな」
「この野郎……！」

『ししょう！』

「……ほら、時間だよ。またね、私の花嫁」

ゆるゆると、薄ぼんやりとした視界が開けた。

※※※※※

目を開けてもぼんやりし続けている霊幻に、何度も茂夫は呼びかけ続ける。

ふぅ、とようやく霊幻が吐いた息が熱っぽくて、茂夫はドキリとした。
「あの野郎……淫紋みたいなことしやがって」
乱された下肢。着物を割り開いて覗く白い足が淫靡で、茂夫は目のやり場に困っていた。
はっきりと霊幻のアレが兆しているのも分かる。
「師匠……抜きましょうか？」
「あぁいいよ、自分でやるから。ティッシュある？」
窮屈そうに勃ち上がっている霊幻に、おずおずと茂夫はポケットティッシュを渡す。
そしてやしろに霊幻だけを残した。
が、気になって茂夫は少しだけ扉を開けて、覗いてしまった。
「ふっ……んっ、」
霊幻の白い指が、せわしなく色の淡い性器をこすっている。
（師匠裏側が好きなんだ）
昂ってきた霊幻はティッシュを先端にかぶせ、ぐりっと自分で鈴口をえぐる。
「ん……！」
かるく下唇を噛んで、ぎゅっと背を丸めて霊幻は達した。
（すごいもの見ちゃった……）
自慰に集中していた霊幻に気付かれないよう、そっと扉をしめなおす。
しばらくすると身支度を整え綿帽子をかぶった霊幻が中から出てきたので、着替えを待ってから、茂夫は途中まで霊幻と一緒に帰宅した。

「……なぁ。今晩は俺のオナニーおかずにするのか？」

たまに、自業自得なセクハラとか、されながら。